ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.6 June 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

- 巻頭言
  世俗の立場での布教
  ／永尾　教昭 …… 1
- 日本語教育と海外伝道（35）
  国際化の中での日本語教育⑥
  ／大内　泰夫 …… 2
- 遺跡からのメッセージ（70）
  大和の文化遺産を学ぶ⑧―古代多胡郡の設立と石上麻呂
  ／桑原　久男 …… 3
- 伝道と翻訳―受容と変容の"はざま"で―（29）
  仏典翻訳の歴史とその変遷⑫
  ／成田　道広 …… 4
- 音のちから―中国古代の人と音楽（2）
  古代楽人の霊力
  ／中　純子 …… 5
- コロンビアへの扉―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（16）
  5.コロンビアの体質7
  ／清水　直太郎 …… 6
- ヴァチカン便り（50）
  法王のイラク訪問
  ／山口　英雄 …… 7
- ニューヨーク通信（9）
  リスタート（再始動）・ニューヨーク
  ／福井　陽一 …… 8
- 思案・試案・私案
  「碍」の字表記問題再考（13）
  ／八木　三郎 …… 9
- 図書紹介（122）
  岡野彩子著『ボンヘッファーの人間学』
  ／堀内　みどり …… 10
- おやさと研究所ニュース …… 11
  2020年度「教学と現代」報告（金子昭）
  ／新刊紹介

巻頭言

世俗の立場での布教

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

先月号で、天理教の海外拠点において聖と俗のスペースを分けるべきだと書いたところ、ある教会長から「聖と俗を分けないのが天理教の長所ではないか」とご質問を頂いた。書いたことと矛盾するようだが、筆者はそれについては基本的に同意する。

そもそも在家の形を取る天理教の教会長は、必然的に俗世間に身を置かざるを得ない。筆者も妻とともに4人の子どもを育てたが、彼らが幼い頃は幼稚園の保護者会に出て、スーパーで紙おむつを買うこともあった。信者夫婦の家庭問題を相談しながら、自分たちが夫婦喧嘩をしていることもあったのである。出家であればそういう世俗に身を浸すことも少なく、神の取次者としての威厳や清廉さは外面上は保ちやすいかも知れない。

カトリックや正教会の聖職者は言うまでもなく出家だが、日本では明治以降仏教各派は妻帯が許され、字義通りの出家ではなくなった。天理教も含めて、同じ頃に成立した各宗教も在家だ。ただもともと神官の家系である黒住宗忠、神がかりの5年後には独立の広前を持つに至った出口なお、家業をやめ取次に専念せよと神に命じられた金光大神とは異なり、中山みきは「神のやしろ」となり立教した後も、長らく聖なる場所に鎮座ましますことなく、家庭生活の中にあった。例えば立教から3年後には流産をしている（『稿本天理教教祖伝』34頁）。つまり「神のやしろ」となってからも夫との間に夫婦の関係があったのだ。さらに20年近く経った後でも、家計のために家族が糸紡ぎなどの言わば内職をしているのを手伝っている（同39頁）。天理教は、そういう雛形も受け継いでいると思われる。つまり、人としては、教会長は隔絶された世界に生きるのではなく、日常の俗っぽいところに入りその中で教えを説いている。

ただ、空間的な意味となるとどうか。教会が私的な教会長家族の住まいでもあるので、聖と俗が混交するということは言葉を変えれば公と私が混じり合うということになる。神殿は公的な空間であるべきだが、そこに私的な生活が入ることもある。それでも、古くから隣近所との付き合いを重んじプライバシーの保持にあまり拘らない日本人同士（高温多湿気候で、近年はともかく、かつては襖と障子のみで仕切られている日本家屋の影響もあるのだろう）なら、まだ問題は少ないが、欧米人などは他人の私的空間に入ることは大いにためらいがあり、それが神殿だと言われても戸惑うだろう。

海外の天理教の拠点の場合、もちろん個人宅では決してないが、拠点長はじめ専従職員は住み込むという形を取っている。そういう慣習の中でどうしても公と私が混交しやすい。将来的には、海外ではその慣習自体を考える必要もあると思うが、工夫することも必要だろう。

カトリックは出家だが、プロテスタントの牧師は人によっては結婚し家庭も持っている。筆者が知っている、海外のあるプロテスタント教会の場合、同じ敷地内でありながら、礼拝場のすぐ裏に独立して牧師の家があり、礼拝場の入口とは完全に分けて別の入口から入る。そして両者は互いに行き来できない構造になっていた。牧師が礼拝に出るときは、一旦敷地外に出て改めて礼拝場に入るという形になっている。

本誌2020年4月号で、「異文化伝道」ではなく「海外布教」を考えるという意味のことを書いたが、それは、天理教の場合教義や祭儀をどう普遍化していくかという問題以前に、このように世界のいくつかの地域で、日本人や日系人以外の人々にどう天理教に親しんでもらえるかというレベルにいまだ留まっているからでもある。